

タガログ語、タグリッシュ、英語そしてチャバカノ語 — カオスの中のアイデンティティー —

萩原 寛

長崎県立大学名誉教授

1. 多言語併用社会



フィリピンおよび周辺地域

【出典】 Geographic Guide - Travel and Tourism <http://www.geographicguide.com/asia/maps/southeast.htm>

フィリピンは首都マニラのあるルソン島、観光客に人気の高いセブ島、日本向けバナナの一大生産地のミンダナオ島をはじめ、大小 7,107 の島々からなる国である。ある日突然、地球の裏側からやって来たスペイン軍が線引きをして作った植民地を母体としており、¹いくつかの部族が離散集合を繰り返して 1 つにまとまり、やがて国として成り立ったという歴史を持たない。相互を結ぶ交通

¹ 1543 年に香料諸島を求めてメキシコを發ったビジャロボス Ruy López de Villalobos 一行がルソン島、サマル島、レイテ島に到達。これらの島々を当時はまだ皇太子で、後に天正少年使節団が謁見することになる国王フェリーペ Felipe2 世に因んで「フェリーペの島々」Las islas filipinas と名付けた。英語の国名が The Philippines と複数形なのはここに由来する。

網が未発達な熱帯の島々という地理的条件から、新大陸の植民地で見られた宗主国スペインの言語を領内に行きわたらせ、やがては庶民の日常言語となるように仕向け、統治や布教を容易にするという統治方法は不可能だった。そうした現地報告がフィリピン各地に送り込まれた宣教師から次々と寄せられ、新大陸方式は早々に断念せざるを得なくなった。²この状況は、スペインが1571年にマニラに総督府を置き、ヌエバ・エスパーニャ副王領を介して間接統治した時代は無論のこと、この副王領が1821年に独立してメキシコとなり、スペインが直接フィリピンを統治するようになってからも変わらなかった。新大陸方式が可能となったのは、19世紀末の米西戦争(1898-99)にスペインが敗れ、植民地の主がスペインからアメリカに代わってからのことである。アメリカは莫大な資金を投入して英語の普及を推進するとともに、教育現場、新聞、書籍、映画、ラジオなど様々な場面からスペイン語を軒並み一掃していったのである。

こうして、フィリピンの人々は、フィリピノ語³、すなわち国語としての体裁を整えつつあるタガログ語だけでなく、ある程度の学校教育を受けていれば、習熟度の個人差は著しくともほぼ不自由なく英語を話せるいわゆるバイリンガルであり、後述するように、非タガログ語使用地域では、そこに現地の土着言語が加わるため、トライリンガル以上の多言語使用状況になっている。ヌエバ・エスパーニャ副王領を介した間接統治時代から、およそ3世紀半の長きにわたり宗主国の言語の座にあったスペイン語は、アメリカによる統治が始まってからもなお、少なくとも20世紀末までは、最上流階級のステイタス・シンボルとして、また国立図書館の書庫を埋める膨大な量のスペイン語で書かれた公文書の山として、それなりの存在感を与えていた。しかし、家庭内でもスペイン語を日常言語としていた人々が高齢化により急速に減少した結果、マルコス Marcos、アキノ Aquino、アロヨ Arroyo などの苗字に、スペインによる統治時代の痕跡を留めるのみとなった。また、名前の部分もスペイン語系から英語系への切り替えが進行していて、親しみを表す縮小辞もスペイン語系ではなく英語系が好まれ、例えば、Teresa なら Teresita ではなく Tere または Teri を用いるようになってきている。

多言語状況について述べると、フィリピンにはタガログ語を含めて187の言語の存在が記録されており、⁴中でもセブ語、ビコール語、イロカイノ語、イロンゴ語、タウスグ語などの主要言語では、話者人口が100万人に達している。こうした地域の人々がタガログ語圏に移住したり、本研究テーマのチャバカノ語のようにタガログ語圏内に居住している場合には、タガログ語(フィリピノ語)と英語に加え、出身地の土着言語が加わるトライリンガルとなる。さらに、それ以上の例も報告されている。ユネスコの世界遺産に登録された棚田群で有名な村バナウエはイフガオ語圏にあるが、2016年8月30日付の *CNN Philippines* の生活欄の記名記事によると、バナウエの生徒たちは、学校

² 当初はスペイン・ハプスブルク朝初代のカルロス1世が1550年に発布した、「先住民の教育は王室の言語であり国家の言語たるカスティージャ語(スペイン語)で行うべし」とする法令第18号が適用され、その後も同じ趣旨の法令が出されたが、次々と現場で反故にされ、ついには1582年に聖職者評議会が、1596年には王室も土着言語による布教と教育を認めざるを得なくなった。Quilis(1992: 63) および Pámparo (1993: 316-317)。

³ 1939年に *wikang pambansa* (国語) と制定されたタガログ語には音素 /f/ がいないため、*filipino* はピリピノ [pili'pino] と発音される。そこで国は表記を1959年に *pilipino* としたが、首都圏の突出した経済発展を背景としたタガログ族優位状況への他の有力な土着言語話者からの反発が大きく、全国の言語を代表する国語としてのイメージを与えるため1971年に *filipino* に改定した。(Gonzalez 1998: 487-488)、(小張 2004: pp.57-63)。

⁴ *Ethnologue* (2017)によると、187言語のうち4言語が死滅し、残りの183言語のうち175言語は土着言語で、英語をはじめ7言語は外部から入ってきた言語である。 <https://www.ethnologue.com/country/PH>

では英語とタガログ語（フィリピン語）を使って勉強し、クラスの仲間たちとはイロカノ語でおしゃべりをし、家庭ではイフガオ語を話している。村の教会ではこの4言語で讃美歌が歌われ、牧師はこの4言語を淀みなくランゲージ・シフトしながら神の道を説いている。また、同記事は全国の主婦の60%が英語やタガログ語以外の言語で暮らしていると報告している。⁵こうした多言語併用社会では、いつ、どのような条件下でランゲージ・シフトが起きるかは予測不能で、言語の選択は発話者のその時の気分によって決まり、極めて恣意的なものである。会話の前に会話構成員一人一人の言語習熟度と話柄に応じてどの言語で話すかを取り決め、そこから会話に入るというわけではない。ランゲージ・シフトは常時起きうるオンの状態にあり、そのレベルも言語まるごとの切り替えから他言語の語句の挿入に至るまで多種多様で、会話が単一言語の使用に終始するほうが却って珍しい。

2. タグリッシュのあらまし

2.1 英語公用語化とバイリンガリズム

英語をタガログ語（フィリピン語）と並ぶ公用語の1つとして制定したのは、1935年発布の憲法第13条第2項であった。前述したように、植民地の新たな主となったアメリカは、教育の現場からスペイン語を極力駆逐することを目指し、憲法発布に先立つこと10年前の1925年に、すでに高等学校と大学の授業を以前の宗主国の言語であるスペイン語から現宗主国の言語である英語へと切り替えていた。この憲法の条文とそれに先立つ米政府の動きに対する反動で、1952年に法令第709号（マカローナ法）が施行されて、全大学および私立高校ではスペイン語教育が義務化されたが、1973年発布の新憲法によりフィリピンの公用語はフィリピン語と英語とされ、スペイン語はついに公用語の地位を追われるに至った。

次いで、1987年発布の憲法第14条第7項に、公用語はフィリピン語および法改正が行われるまでは暫定的に英語とする旨が改めて明記され、現在に至っている。⁶一時、タガログ語（フィリピン語）の普及に反比例して「国民の英語力」が低下したという懸念が広まったが、2003年5月17日にアロヨ大統領が大統領令第210号を発令して、教育の媒体としての英語の使用を強化した。そこには、英語運用能力に一層優れた卒業生を世に送り出せば、彼らはICT（情報通信技術）分野で高い技術力を磨いたあと海外労働力となり、フィリピン経済のためにUSドルを稼いでくれるという政策上の思い入れがあった。⁷

教育の場における英語とタガログ語のバイリンガリズムは、公用語をフィリピン語（タガログ語）と英語する旨を定めた新憲法発布の翌年、1974年に教育文化スポーツ省の施策として施行されることとなった。すなわち、タガログ語は音楽、保健体育、道徳、公民、社会の授業で用い、算数、理科、技術、家政、農業、工業、企業の授業は英語で行うという棲み分け方針が打ち出されたのである。こうしたバイリンガリズムを国が支える背景には、国民が英語に与える付加価値の大きさがあつた。Martin (2010:252-258) は英語をめぐる4つの神話を次のように整理している。

⁵ “Making sense of 187 Philippine languages: An apology for the background noise”, *CNN Philippines*, Life, August 30, 2016. <http://cnnphilippines.com/life/culture/2016/08/29/filipino-languages.html>

⁶ Garcia Louapre (1990)、Gonzalez (1998: 488)および同 (2003: 3)。

⁷ Isabel Pefianco Martin (2010 : 256)

- i) アメリカ英語だけが正しい英語である。
- ii) 英語だけが経済的疾患の特効薬である。
- iii) 英語とフィリピン語は対立する言語である。
- iv) 英語だけが知識に導く言語である。

神話 i)は統治国の英語だけを正しいと信じる謬見を、神話 iii)は教育への英語の導入に反対する人々のナショナリズムを、それぞれ批判するために持ち出された神話である。一方、本論のテーマに関わるのは神話 ii)と iv)である。フィリピン人の中に見られる、英語こそが己が未来を切り拓いてくれ、暮らしを豊かにし、国を富ませてくれるという英語への過大な付加価値は、しかしまた、公立学校で等しく英語を使った授業が行われることから、Sibayan (1994:223)や Thompson (2003:19)のように、都会でも田舎でも国民に貧困から脱出する機会を与え、知識の世界への扉を開いてくれる大変な等化装置であるとして、一定の評価を下す意見もある。問題は高等教育、ことに研究活動と直接に関わる大学教育である。学問的記述に使えるほどの学術性がフィリピン語すなわちタガログ語語彙には乏しいため、文学などの限られた分野を除いて、すべて英語に頼らざるを得ない。こうした状況について、つとに Gonzalez (1997)が、フィリピンの学界は最新の学識を得るためにはアメリカに依存し続けなくてはならないと指摘している。

2.2. 英語とタグリッシュ

前節で、英語とタガログ語のバイリンガリズムと使用域の棲み分けについて述べたが、このシステムが十全に機能して学習が進んでいくには、英語での意思疎通が教室でほぼ完璧に行われていることが前提となる。しかし、習熟の程度は生徒によって一定ではない。その一方で、なるべく英語を使って教育したい、授業を受けるほうもなるべく英語に習熟したいという欲求がある。そうした中で生まれたのが、タグリッシュ Taglish というタガログ語 Tagalog と英語 English が混ざり合った言語形式である。最初は、教育を受けた人々が自然科学用語として造語されたフィリピン語（タガログ語）は使い勝手が悪い⁸として、フィリピン語の学術的な文脈に、使い慣れた英語語彙を単純に挿入していたものが、バイリンガル教育方針の決定を契機に、ラジオやテレビを通じて民衆の間に急速に広まった。Sibayan(1978: 44) は、タグリッシュは 1960 年代から使われており、Marasigan(1983:7) は新聞に初めて記事として取り上げられたのは 1967 年のことだったと述べている。名称も当初は「まぜこぜ」を意味する halo-halo だったが、Engalog を経て Taglish となった。⁹タグリッシュには英語を主としてタガログ語を混ぜるタイプと、タガログ語を主として英語を混ぜるタイプの 2 つに大別される。しかしながら、クレオールのように 2 つの言語の文法体系のうち最も複雑な部分を互いに簡略化し、一方の言語を母体（基層）に、他方の言語は語彙を供給する lexifier（上層）にして融合し、叙述部を中心に新たな文法体系を生み出した、というわけではない。その意味では、系統の異なる二つの言語の文構成素がサラダのように混ざり合った言語に過ぎない。換言すれば、タグリッシュとは、英語とタガログ語の間で行われるコード・スイッチングによる、その場限りの言語形式なのである。

⁸ 「重力」のように比較的古い科学用語は、語源がスペイン語 *gravidad* の *grabidad* で対応できるが、例えば、「級数」や「偏光」にあたるタガログ語はなく、英語の *series* や *polarization* をそのまま用いる。

⁹ タガログ語の部分が多いのを Engalog とする見方もある。Thompson (2003: 40-41)、小野原(2004: 49)。

Poplack (1980)によると、このコード・スイッチングには、以下の3つのパターンがみられるという。

- i) inter-sentential switching
- ii) tag- switching
- iii) intra-sentential switching

Zirker (2007)は、i)は言語1に言語2が文レベルで挿入されるパターンであり、ii)は言語2の短い表現が言語1の中に挿入されるパターンであるとし、Jones (2004)は、iii)は言語2が句レベルで言語1の統語上の文構成素となるパターンであると述べている。具体例として、フィリピン語とタグリッシュのバイリンガルな工場労働者におけるコード・スイッチングを研究した Alic and Gustilo (2013:65-66)が、Mercado (2010)の挙げた用例をもとに、タグリッシュの3つのパターンを分類しているので、以下に紹介する。なお、タガログ語部分への下線付けと語彙レベルの大まかな英語対訳は筆者による。ただし、ang は主語焦点を示す格標識なので対訳はない。

i) inter-sentential switching

- (1) Okay kindly keep your things? Kunin niyo ang notebook sa akin
get you from me
= You get the notebooks from me.

- (2) Tatanungin ko kayo ulit. Is there a big chance that you will get an even number?
will ask I you again
= I will ask you again.

ii) tag- switching

- (3) Q what do we call energy coming from the houselight?
yes
=Ya,

- (4) We see thunder...lightning...sea...di ba?
don't~
= don't we / right

iii) intra-sentential switching

- (5) It is not feeding pa rin ito may feeding dito
yet also here there's here
= It is still not feeding here there is feeding here.

- (6) What is the easiest...easiest, ano, lowest term...
what
= well

2.3 タグリッシュの文法的特性

タグリッシュは、テレビのテロップや、e-mail、SNS、タブロイド判の新聞や漫画などを除き、一回の発話ごとに消えていく言語形式に過ぎないが、それでも各タグリッシュに共通する特性が見られる。この文法的特性に関しては、すでにくつかの研究報告があり、以下にその要点を簡略に

まとめる。¹⁰ただし、例文に関しては一部を除き、英語との対比を明らかにするために、原文でタガログ語が混ざっていた部分は省いてある。

2.3.1 音韻的特性

母音に関しては、長母音と短母音の対立がしばしばなくなるため、sheep / ship や fool / full の弁別素性がなくなり、音声的に意味の区別ができない。子音に関しては、/ʃ/と/ʒ/、/s/と /z/の間の対立がなくなる。また、/θ/は/t/、/ð/は /d/になるため、these / this や three / tree の間の対立が消滅する場合がある。

2.3.2 語彙的特性

英語から取り込まれた語彙だけでなく、スペインによる統治時代の残像として、スペイン語語源の語彙がわずかながら見受けられる。

i) タガログ語やスペイン語の言い回しで使われる語彙の英語直訳。

(7) green joke = obscene joke < green = sp. verde

(8) open the radio = turn on the radio < open = t. buksan

(9) close the light = turn off the light < close = t. isara

ii) 本来の英語にはない語義の付加。

(10) jingle = urinate

(11) comfort room (CR) = restroom (WC)

(12) American time = being punctual

iii) 本来のスペイン語にはない語義の付加。

(13) asalto = party on the eve of one's birthday < sp. = surprise party

iv) 社名、商品名、英語慣用句などからの造語

(14) pentel pen = colour marker

(15) holdupper = thief

(16) ballpen = ball point pen¹¹

2.3.3 統語的特性

統語面においては、動詞を中心に時制、語法、主語との活用の不一致、タガログ語接辞の併用による様態表現の充実など、名詞における複数形と単数形の変則性、前置詞の誤用などさまざまな特性がみられる。

i) 過去形を使うべきところに現在完了形。

(17) I have seen him yesterday.

¹⁰ 芝田征二(1990: 178-188)、Gonzalez(1997:39)、Thompson(2003: 53, 140-153)、Bautista(2004: 230)、Kirkpatrick(2007: 131-132)、Dayag(2012: 94-96)。用例もこれらに準拠した。

¹¹ Dayag(2012: 95)は ballpen のほかに aircon もタグリッシュとしている。現代英語の収録語数が最大に近い英辞郎では、air-con を「東南アジア英語の会話表現」としている。しかし、日本へ出稼ぎに来た多くのフィリピン人女性労働者が、離日の際に大量の日本製品を土産にしていた 80 年代から 90 年代にかけて、製品を持ち帰った本人とともに和製英語が流入した可能性も一考に値するであろう。

ii) 過去完了形を使うべきところに過去形または現在完了形。

(18) In a recent Senate the former President Estrada has claimed it was...

iii) 習慣的行為にも進行形

(19) He is going to school.

iii) 現在形で主語の人称・数と動詞の活用が一致しない。

(21) He go to school.

iv) 時制が一致しない

(22) He says he had lived in the UK before.

(23) The students couldn't understand why they will have to come to school on Sunday.

v) 動詞は随時タガログ語の焦点システムに応じた接辞を伴う。

(24) Nagha-huddle rin yong mga puti.

= Hudling also those [agent] PL white

= The whites are huddling, too.

vi) 命令文では疑問文の語順を維持。

(25) Ask what are boys fond of playing.

vii) 副詞は文の先頭または末尾に挿入。

(26) Only once na hindi siya naka-double digits

already not he/she able

= It only happened once that he was not able to score double digits.

viii) 前置詞の誤用。

(27) located at (= on) the 19th street / up for (= to) you / based from (= on)

ix) 総称と固有名詞に関して定冠詞の用法が英米語と逆。

(28) Ø United States / the Rizal College

x) 名詞の単数形・複数形の誤用。

(29) one of the student Ø / feedbacks

xi) 人称代名詞 3 人称 he, she, it の区別をせずに they で統一。

(30) The work is so heavy that they are taking their toll on the health of people.

= it is its

xii) 品詞のシフト。

(31) Sorry I'm late, it was so traffic.

xiii) 疑問文への肯定・否定の返答は、叙述の内容そのものが判断の対象。

(32) Aren't you busy?--- Yes, I'm not busy.

2.3.4 タグリッシュに見る言語接触の痕跡

英語とタガログ語という構造の全く異なる言語を、センテンスすべてを一方から他方へ切り替えるランゲージ・シフトではなく、構成素単位で発話の中に混在させるには、どちらかの、あるいは双方の言語の語形成も含めた文法構造に何らかの手を加える必要がある。例えば、日本語を母体と

して英語の語彙を混在させた (33)¹²では、tuck in (たくし込む) の前置詞 in がすでに「インする」(=たくし込む) という動詞にシフトして定着していることを前提に、「ウエストイン」(=ウエストの高さでたくし込む) という和製英語が新たに造語されている。rider's jacket (オートバイ乗りの短い革製上着) の省略形「ライダーズ」は音韻的に/zが/sへ無声化している。vivid は形容詞であるが、そのまま名詞「赤色」に先行することなく、形容詞の語尾「な」を補っている。natural も同じく形容詞であるが、動詞の前では「ナチュラルに」と助詞「に」を副詞化の接尾辞-ly に対応させている。動詞 harmonize には、主語 knit に合わせて屈折させ、語尾に接尾辞-s を加えるという操作の痕跡は見られない。つまり、英語の原義と文法特性を保ったままの (34) は非文となってしまう。

(33) ウエストインしたニットがライダーズのサイズ感とよくマッチして、ビビッドな赤色のアイテムとナチュラルにハーモナイズ。

* (34) タッキンしたニットがライダーズジャケットのサイズ感とよくマッチして、ビビッド赤色のアイテムとナチュラルにハーモナイズ。

このような二言語の接触で見られる文法的操作に関して、Thompson (2003:146) は Muyskin (2000) が提唱する対応型語彙化 congruent lexicalization の概念をタグリッシュに当てはめて、2つの言語の文法が合致すると、対応型語彙化によって双方の言語は合流して語彙を分かち合うが、英語とタガログ語のように似ていない言語の間で起こる合流には 2 つ方法があると述べている。1 つは英語の談話素性 discourse features である決まり文句や返答、接続詞を(35)のように節の外部または少なくとも周辺部に置くことで、タガログ語のフォーカス・システムを阻害しないようにする方法である。

(35) Nahuli lang siya doon in that last play.

caught only he there

= Only he was caught in that last play.

もう 1 つは、(36) のように sa (方向、場所格)、para sa / para kay (受益者格)、ng / ni (行為者格) ang / si (主語焦点) などの格標識を英語の前置詞として解釈したり、(24) のように英語の動詞にタガログ語の接辞を付加して焦点システムに溶け込ませる方法である。

(36) There is no tomorrow para sa Gordons team.

for [patient]

以上の観点に立つと、前節で列挙した特性の中でも、とりわけ統語的特性がタガログ語の文法構造を根源としていることが分かる。これらは英語から見ればすべて誤用であるが、タガログ語の文法から見れば、どれも問題がないのである。タガログ語の動詞システムは 3.4.3.2 で詳述するが、ヨーロッパ諸語のような時制と法には依らず、事象の生起を時間概念のない「不定相」、もう終わった行為や状態を表す「完了相」、まだ終わっていない行為や状態を表す「未完了相」、まだ起きていない行為や状態を表す「未然相」の 4 つの相に基づいて叙述する。この相システムを無理して時制システムに対応させると、「完了相」は過去、「未完了相」は現在、「未然相」は未来になる。したがって、過去形の代わりに現在完了形を使おうが過去完了形を使おうが、すでに終わった行為あるいは状態であるという情報が伝われば十分である(i, ii)。同様に、まだ終わっていない行為また

¹² キナリノ「ニットをインして、新しい冬のコーディネートをあなたも取り入れてみませんか?」を基に作成。
<https://kinarino.jp/> 2018年3月6日閲覧。

は状態であることを伝えるのなら、現在形だろうが現在進行形だろうがまったく問題がない (iii, iv)。複文の動詞に時制の一致が見られないのは、発話の時点で複文の動詞が表す行為または状態がすでに起きたことなのか、同時に進行していたのか、あるいはその時点より先に起こることを予測していたのかにより動詞の相が決められるからである(iv)。また、主語の人称と数によって動詞が活用することもない(x)。タガログ語では文構成素の語順は、必ず文頭から二番目の位置に生起する前節語の存在、叙述文か強調の特定文か、倒置詞を伴うか否か、動詞は一般動詞か否かなどの要因により複雑に変化するが、いわゆる複文になっても語順は変わらない(vi)。名詞が複数形にならないのは、接尾辞の付加や母音の変化によって複数概念を表現するのではなく、複数小辞 *mga* [ˈmaga] を名詞に前置すれば良いからである(x)。タガログ語では *matami* (甘い、砂糖、飴) のように形容詞と名詞が同形で意味的に密接な関係にある場合がある(xii)。人称代名詞 *he, she, it* を弁別しないのではなく、言及の対象は話し手でも聞き手でもないという情報が与えられれば十分なのである。タガログ語の人称代名詞に性別はなく、事柄に対して *deixis* はあっても *anaphor* はないので、*it* に相当する語彙がタガログ語にはない。ただし、人称代名詞 3 人称複数形を敬語表現では 2 人称単数として用いることはあるが、タグリッシュのように 3 人称複数形を 3 人称単数形の代用にする例は見られない (x)。英語の前置詞の多くは方向・場所の格標識 *sa* として認識され、動詞が表す行為に方向・場所の概念が関わることを伝えれば充分である (viii)。

2.4 タグリッシュの存在意義

前節で挙げたさまざまな特性は、タグリッシュをタグリッシュたらしめるものである。英語の母語話者から誤用として指弾されたくなければ、所謂正しい英語にシフトすれば問題がないのにも拘らず、高い教育を受けた者までがタグリッシュを使い、英語との併存状況が続いているのには理由がある。タグリッシュには社会的な存在意義があるからである。

存在意義の 1 つは、英語習熟度の低い学習者への補助言語としての役割である。1974 年に教育文化スポーツ省が、科目による棲み分けるタガログ語と英語のバイリンガリズム路線を打ち出していたが、Dekker & Young (2005: 186)によると、2005 年から小学校の理系の科目は英語だけで授業を行うことが徹底されたという。とは言え、クラスの生徒全員が英語運用能力において完璧なまでに優れているわけではないので、その場合には英語とタガログ語の比率を自由に調節できるタグリッシュが補助言語として役立つ。しかしながら、タグリッシュを授業で使うことに対する厳しい見方もある。Metila (2009: 48)によると、私立の女子小学校の 4 年生と教師の間のコード・スイッチングを観察した結果、コード・スイッチングを認める生徒が 44%いる一方で、生徒の 50%は教室では英語またはタガログ語の一言語使用に限るべきで、コード・スイッチングをするべきではないと答えたという。また、学問的に程度の高い授業は、英語、タグリッシュ、タガログ語のうちどれを用いるのが適切かという質問には、英語と答えた者が 88%だったのに対し、タグリッシュと答えた者は 6%から 12%だった。因みに、タガログ語と答えた者は皆無だった。

もう 1 つの存在意義は、タグリッシュの使用が与える親近感である。完全な英語ではないため、逆にフォーマル感が薄れ、その分親しみを感じやすい。Thompson (ibid.:41, 55, 56)は、今日では、社会的に高い地位の人も含め、教育を受けたフィリピン人のほぼ全員が、純粋な英語またはタガログ語を使うべき場面を除いてタグリッシュを使っており、タグリッシュはフィリピン人にとって、

くだけた英語 *street English* としての役割を担っているという。教室では、英語運用能力はもはや努力の賜物とは見られず、自分が優位に立っていることを相手に見せびらかすような不快な態度と解かれてしまう。クラスメートからのプレッシャーに屈せずに教室の内外できちんとした英語を使い続けると、マイナス・イメージを背負い込むことになることまで断言している。社会に出ても、技術関係の文献の作成、重役会議や理事会での発言、仕事の交渉はすべて英語のみで行われるが、一般職員同士や市民との普通のやり取りはタグリッシュで行うという。また、Thompson (ibid.:206-207) は、テレビのスポーツ番組で、若手のインタビューアーが年配の大物コーチに向かって、どのようにコード・スイッチングをするか観察した結果、若手は敬意を払うために極力英語か英語寄りのタグリッシュを使うのに対して、大物コーチはタガログ語かタガログ語寄りのタグリッシュで受け答えをし、テレビを見ている英語があまり得意でない地方のファンに向けて連帯感を醸し出したという。

こうした存在意義がタグリッシュを支えていることは、Lesho & Sippola (2013:6)の研究からも窺える。タガログ語と英語とタグリッシュの間でコード・スイッチングが行われた場合、全国どこでもタグリッシュへのコード・スイッチングが割合として最も高く、同時にタグリッシュは、英語を日常的に使用している高学歴の人々からなる上流社会を想起させることから、ステイタス・シンボルとみなされるとも指摘している。



テレビニュースのタグリッシュの例 (2016年5月28日投宿先のマニラのホテルにて)

3. チャバカノ語のあらまし

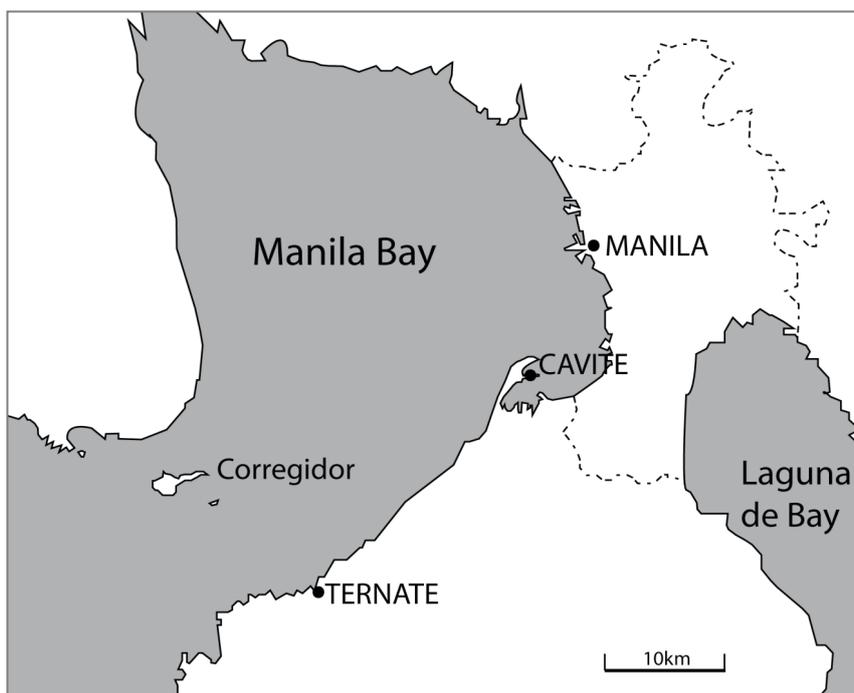
3.1 チャバカノ語の名称の由来

言語名チャバカノは、スペイン語の *español chabacano* 「粗野で下品なスペイン語」に由来する。本来のスペイン語に比べると、冠詞や形容詞に名詞との性数一致が見られず、動詞も主語

の人称・数、時制、法により変化することもない。時制システムは緻密で、動詞は少なくとも 49 通りに活用し、さらに助動詞 *haber* と過去分詞を組み合わせた完了形、動詞 *estar* と現在分詞を組み合わせた進行形、動詞 *ser* と過去分詞を組み合わせた受動態と、活用形の枠が増え続けていくスペイン語の構造と対照すると、チャバカノ語はそのような構造になっていない。スペイン語の動詞の体系は自動詞、他動詞、再帰動詞の 3 つのカテゴリーから成っているが、チャバカノ語では再帰動詞が完全に抜け落ちている。こうした点に蔑称 *chabacano* の由来がある。

蔑称であるにも拘らず、今日のチャバカノ語の母語話者が、フィリピン・スペイン語系クレオール総称として抵抗なく用いているのには、2 つの理由があると考えられる。まず、現代スペイン語では、「言葉が粗野で下品であること」を表す形容詞には *tosco* や *de mal gusto* が用いられ、*chabacano* が使われることは皆無に等しいこと。もう 1 つは、日常生活の中でスペイン語自体に接する機会が極めてまれであるという言語環境である。実際、まだタガログ語が基層語でスペイン語が上層語であった時代は、母語話者はこの名称に抵抗感があったようで、自らの言語をもう少しましな *lengua de tienda* 「市場のことば」やタガログ語 *karihan* を語源とする *lengua carihán* 「めし屋のことば」などと称した。民間伝承として伝わる *español de cocina* 「台所のスペイン語」というのは、往時からチャバカノ語を指す表現ではなく、主に中国系商人とフィリピン人ないしはスペイン人との間の文法構造を持たない片言のスペイン語を並べただけのピジンを指した。¹³

3.2 チャバカノ語小史



Cavite City と Ternate の位置

【出典】 Marivic Lesho & Eeva Sippola (2013:2)より

¹³ Lipski (2001: 9-11)、同(2002: 16-18)、Romanillos(2006:1)、Lesho and Sippola (2014: 6n.)

チャバカノ語が文学の中で取り上げられたのは、エスコスーラ P.de la Escosura、モンテロ・イ・ビダル J.Montero y Vidal などのスペイン人作家だけでなく、フィリピン近代小説の礎を築いたフィリピン人作家ホセ・リサル José Rizal¹⁴などの 19 世紀末の文学作品の中であった。一方、チャバカノ語の言語史に関わる研究は、ティロナ T.T.Tirona (1924)を嚆矢とする。しかし系統だった本格的な研究はウィナム K.Whinnom (1957) の登場まで待たなければならなかった。その後、ウィナムの説に異議を唱えたフレイク C.Frake (1971)からリプスキ Lipski(1985, 1987b, 1992, 2001a, 2001b, 2002, 2003)、パンパロ=ラモス M.L. Pámparo Ramos(1993)、ホルム J.Holm(2001)、シュタインクリューガー P.O.Steinkrüger (2008)と続き、グラント A.Grant (2013) らに至るまでさまざまな研究が行われて来ており、現在はほぼ以下の見解でまとまっている。

スペインがフィリピン諸島の植民地経営を本格的に始めたのは 1565 年だった。ポルトガルは 1494 年にトルデシーヤス条約により大西洋のカボ・ヴェルデ諸島西 370 レグア (約 1770km) でスペインとの間で地球を 2 分したあと、東南アジア各地の探索に乗り出して、香料貿易の足場を着実に固めていった。1522 年に香料諸島と呼ばれるモルッカ Molucca 諸島の現インドネシア領のハルマヘラ島にあるテルナテ Ternate に要塞を築いたのもその一環であった。続いて 1529 年にサラゴサ条約により、モルッカ諸島の東 297.5 レグア (約 1764km) の海上で今度はアジアをスペインと二分割し、スペインはモルッカ諸島をポルトガルに売却した。こうして東南アジアと西洋との交易では、ポルトガル語がリンガ・フランカ lingua franca として不可欠の存在になっていった。

一方、オランダの前身であるネーデルラント連邦共和国は、インドや東南アジアでポルトガルの海上貿易を圧迫し、ポルトガル領ハルマヘラ島のテルナテを占拠していたが、1580 年から 1640 年までポルトガルを併合していたスペインが 1606 年に奪い返した。しかし、テルナテ奪還を目指すネーデルラント連邦共和国の猛攻撃を前に、スペインは 1655 年にテルナテ在住の約 200 家族をマニラ湾沿岸部のエルミタ Ermita、タンサ Tanza、サン・ロケ San Roque (現在のカビテ市 Cavite City) および (ヌエバ) テルナテ(Nueva)Ternate へ移住させた。この時移住した家族が話していたのがポルトガル語系ピジンで、現地のタガログ語やスペイン語と接触する中で、スペイン語系クレオールすなわちチャバカノ語の原型が形成されたと考えられている。

その後、スペイン語が上層語でタガログ語が基層語の言語環境は、外部からの脅威でさらに濃密となった。脅威の原因は、福建出身で平戸在住の商人鄭芝龍を父に、平戸松浦家家臣田川七左衛門の娘マツを母に平戸で生まれ育った鄭成功の台頭である。少年期に父の後を追って大陸に渡った鄭成功は、李自成の樹立した順に北京を追われて亡命政権となった明の再興を企てて各地を転戦し、1661 年に当時オランダ東インド会社の支配下にあった台湾に攻め入り、翌 1662 年にオランダ勢力を一掃して鄭氏政権を樹立した。騎虎の勢いの鄭軍は同年フィリピンを急襲し、マニラ総督府へ使者を送り、自分たちへ朝貢するように脅迫する。その頃には鄭成功は明朝最後の皇帝から皇室の姓「朱」を下賜され、周囲からは尊称として国姓爺と呼ばれていたが、その中国語音からフィリピンではコシンガ Koxinga の名で恐れられていた。台湾からオランダを駆逐した鄭軍の次の標的は、フ

¹⁴ フィリピン独立の国民的英雄と称される José Protacio Mercado Rizal Alonzo y Realonda (1861-96)は、国内で医学を学んだ後、マドリード・コンプルテンセ大学に留学し医学部と文哲学部の両方に在籍して 10 数か国語を習得。10 年のヨーロッパ留学を終えて帰国する 1887 年に、スペイン語の処女作“Noli me tangere”をドイツで出版。銃殺刑の前夜に書いたという長編詩“Mi último adiós” (最期のさようなら) まで全作品をスペイン語で書いているが、自身もチャバカノ語話者であり、それを作品中の会話に活かしている。(Romanillos 1996: 6-8,14,15)

イリピンを支配するスペインであるという噂が流れ、スペインは全艦隊をマニラ湾に集結させて総督府を守る陣営を敷くことになった。そのため、翌 1663 年にハルマヘラ島のテルナテを最終的に放棄し、残留家族のすべてを前述のマニラ湾沿岸部地区へ移住させた。特にカビテはメキシコのアカプルコと海でつながるガレオン貿易の出入港であり、基地と海軍工廠があったことから、テルナテからの移住者だけでなく、かなりの数のタガログ語話者がスペイン人と常日頃接する環境が生まれた。こうした中で (ヌエバ) テルナテのテルナテ語 *ternateño* とは別のピジンが生まれ、やがてマニラ市内ではエルミタ語 *ermitaño*、カビテではカビテ語 *caviteño* というクレオールが形成されていったと考えられている。

また、南部のミンダナオ島のサンボアング *Zamboanga* では、1635 年にイスラム勢力の侵攻に備えて要塞を建設していたが、コシंगा来襲の噂に 1663 年に全艦隊をマニラ湾に集結させて以降は、駐屯地は空いたままの状態になっていた。そこで、1718 年に同地への再入植が始まり、かつてハルマヘラ島からマニラ湾沿岸部のテルナテへ移住したマルディカス *mardikas* と呼ばれる人々もこれに加わった。彼らマルディカスの言葉に見られたポルトガル語ピジンの片鱗は、ミンダナオ島のビサヤ語 (セブ語、セブアーノ語とも) を基層とし、スペイン語を上層とする 4 つのチャバカノ語、すなわちサンボアング語 *zamboanguéño*、コタバト語 *cotabateño*、ダバオ語 *abakay* に溶け込んでいったと考えられている。サンボアングにはスペイン海軍の総司令部が置かれていたため、スペイン海軍基地と海軍工廠の町であるカビテとの人的交流も盛んであった。それはまた、マニラ湾沿岸部のチャバカノ語とミンダナオ島のチャバカノ語がある頻度をもって接触することを意味した。¹⁵

日本との関係で言うと、日本は歴史上二度、チャバカノ語と関わっている。最初は、コシंगा (鄭成功) が再び来襲するとの噂が流れて、スペイン海軍の全艦隊がマニラ湾に集結し長く留まった時である。これにより、タガログ語とスペイン語が接触する機会が飛躍的に増え、チャバカノ語の形成を促進させた。2 度目は、1942 年に日本がフィリピン全土を軍事占領して傀儡政権を樹立させ、マニラ旧市街のイントラムロス地区に参謀本部を設置した時である。1945 年の 2 月 3 日から 3 月 3 日にかけて、歴史上「マニラの戦い」と呼ばれる連合国軍側の猛反撃が続き、熾烈を極める市街戦が繰り広げられる中、マニラ湾に浮かぶ米艦隊からは絶え間ない艦砲射撃がイントラムロス地区に撃ち込まれ、街は廃墟と化した。戦闘で市民におよそ 10 万人の犠牲者が出たが、その中に多数のエルミタ語話者が含まれていたのである。生き延びたエルミタ語話者も瓦礫の山となった街を捨てざるを得ず、エルミタ語はわずかひと月のうちに、この世から消え去っていったのである。

3.3 チャバカノ語研究の流れ

チャバカノ語の発生過程についての研究とは別に、語そのものを文法的な観点から記述して分析する試みはヘルマン A.B.German (1932) に始まる。その研究の根底にはチャバカノ語はスペイン語の崩れた形という認識があるためか、両者を比較して発音の違いや、タガログ語の接頭辞と接尾辞が使われること、タガログ語と同じく畳語が形成されることなどの音声音韻や形態的特徴を記述するに留まった。H.McCaughan (1954) もサンボアング語の民話に逐語訳と全体の意識を付して簡単に文法を紹介したに過ぎなかった。ミランダ G.Miranda (1956) の研究は、チャバカノ語の文法を徹頭徹尾、

¹⁵ Steinkrüger (2008: 151) は、この接触によりサンボアング語の古い層に新しい層が重なり、テルナテ語よりもスペイン語やカビテ語に音韻や語彙の面で近くなったと推測している。

スペイン語の文法構造に当てはめようとする試みであった。1965年にチョムスキーの生成変形文法が一世を風靡すると、チャバカノ語を普遍文法の立場から分析しようというリャマード L.C.Llamado (1972)の研究が出た。その研究で、初めてチャバカノ語の動詞システムの分析に、従来の西洋語研究に根差した「人称・時制・法」ではなく、タガログ語の動詞システムである「相」の概念が導入されたが、この分析法はその後しばらく等閑視されることとなる。キリス A.Quilis (1992)は研究対象をマニラ沿岸部のカビテ語とテルナテ語に絞って、調査した語彙項目の中で非スペイン語系語彙が全体の6%を占めることを明らかにした。それに対して、リプスキ J.M.Lipski の一連の研究 (1985, 1987a, 1987b, 1992a, 1992b, 2001a, 2001b, 2002, 2003)は、むしろミンダナオ島のサンボアング語に集中して、マニラ湾沿岸部のカビテ語とテルナテ語は比較の対象としてしか扱っていない。しかし、リプスキの研究は語史に加えて、スペイン市民戦争を逃れてきた移住スペイン人のスペイン語と接触したことによる脱クレオール化現象 *decriollization*、チャバカノ語の社会的位置付け、メキシコのスペイン語からの語彙の流入、世界の他のスペイン語系クレオールとの対比など非常に多岐にわたっている。ogiwara (1995, 2001)は研究対象をカビテ語とテルナテ語に絞り、タガログ語とスペイン語という全く文法構造の異なる言語が融合する際、どのようにして $1+1=2$ にならずに $1+1=1$ となるようになったかを、双方の動詞のシステムに注目して論考した。その結果、スペイン語側は人称・数と時制と法により変化する動詞の活用システムを捨て、タガログ語側は主語焦点機能と格標識、および主語の属性、すなわち行為者、受益者、道具、場所、手段などにより様々に変わる動詞への接辞付加システムを捨て、代わりに動詞にはタガログ語の4つの相システムを充て、主語の選択はスペイン語における判断基準、すなわち人や事物は主語になるが、道具や手段は主語にならないなどの基準を採ったとの結論に達している。

近年の動向として、フィリピン国内に限った研究から、次第にフィリピン以外のスペイン語系クレオールとの比較まで研究視野を広げようとする動きがある。ロレンズイーノ Lorenzino (1993, 2000)は、オーストロネシア語族に属すタガログ語を基層語とするチャバカノ語を、アフリカ諸語を基層語とするコロンビアのパレンケーロ語 *Palenquero* およびオランダ領アンティルのパピアメント語 *Papiamentu* と比較対照して、人称代名詞と動詞句の構造において共通する部分と齟齬する部分が基層語と上層語のどちらに起因するのかを論考した。それまでクレオールの研究は常に上層語の文法知識に基づいており、基層語の文法知識に欠けている点を鋭く批判しているのは特筆に値する。前出の Steinkrüger (2008)は、パレンケーロ語とパピアメント語のほかにはマカオ語(*Macanese* または *Patua*)、マラッカやシンガポールのクリスタン語(*Papia* *Kristang*)に加え、上層語がポルトガル語であるインド-ポルトガル語などのクレオールとまでチャバカノ語と比較している。研究対象は人称代名詞、直接目的語標識および動詞句に共通する基層語の痕跡であるが、上層語間の差異が形態に与える影響についても論考している。シュタインクリューガーもロレンズイーノ同様に基層語からのクレオールへのアプローチの重要性を力説している。前出の Lipski (2009)も、アフリカから南アジア、東南アジアに至るポルトガル語系クレオール、あるいは中南米のスペイン語やスペイン語系クレオールに視点を移すことで、チャバカノ語の動詞部のアスペクト標識 *ta* は、スペイン語やポルトガル語の口語体にも時折見られる *está* ((は) ある、いる) の省略形に、同じく *di* はスペイン語にあってポルトガル語にはない未来を表す迂言法 *ha+de*+不定詞に由来することや、直接目的語の標識に前置詞の *con* (と) を用いるのはチャバカノ語に限らず、世界各地の口語体のスペイン語に見られる

などの報告をしている。Pérez (2015)はカリフォルニア大学が受理した博士論文であるが、世界各地のスペイン語系クレオールとポルトガル語系クレオールの特性をすべて整理した上で、カビテ語に特化した分析を行っている。

もっとも新しい傾向は、研究者自身が基層語の知識を十分に持って臨むケースが増えたことである。研究方法も長期間にわたり現地の人々の間に泊まり込んで、細かなフィールドワークを行い、時間をかけてデータの分析を行うようになってきている。その代表例が、レシヨ M. Lesho とスイツポラ E. Sippola による研究である。レシヨは母語が英語であるが、幼い時にネイティブ・スピーカーの母親からカパンパンガ語を教わり、大学でスペイン語を習得したが、チャバカノ語の研究に先立ってタガログ語も学んだ。スイツポラはフィンランド語が母語で、大学でスペイン語を習得し、やはりチャバカノ語の研究に先立ってタガログ語を学んでいる。現地でのフィールドワークも前者はカビテ市で 2010 年から 2012 年までの通算半年、後者はテルナテとカビテ市で 2003 年から 2010 年までの通算 1 年をかけて行っている。二人はその成果をそれぞれ Sippola (2011)と Lesho (2013)にまとめ上げているが、共同執筆による Lesho and Sippola (2013)と同(2014)は、カビテ語とテルナテ語の現状を克明に記述している。前者は知覚方言学 perceptual dialectology の方法論を用いて、チャバカノ語話者が別のチャバカノ語を聴いてみてどれくらい理解できるかを尋ねるとともに、地図に被験者が考える 2 つのチャバカノ語の境界線を引いてもらうことにより、互いのチャバカノ語にどのような社会的評価を下すか、また互いに関連しあった歴史をどのように思い描くかを調査した。後者では UNESCO (2003)の危機言語の 9 つの評価レベルに基づいて、カビテ語とテルナテ語の消滅の危機状況と、それに対する国や地方自治体の取り組みや市民サイドの保護育成運動について詳細に報告している。

3.4 チャバカノ語の文法特性

チャバカノ語は語彙を供給する上層語がスペイン語であるため、スペイン語話者は聞いていて何となくわかるような気がするが、基層語のタガログ語（フィリピン語）話者は、チャバカノ語にほんの時たま現れるタガログ語語彙を聞き取れても、何を言っているのか全体の文意がつかめない。そのため、チャバカノ語は長いことスペイン語の亜流として扱われ、研究者もスペイン語以外の語彙やスペイン語文法を逸脱する部分は「土着言語の影響」という名の便利な合切袋に放り込んで能事足れりとしてきた。しかし、テニオハ以外をすべて英語語彙にした日本語の文と、語彙だけは日本語で語順が英語になっている文を比較すれば、前者のほうが英語話者にある程度文意を推測してもらえらるであろうが、そのことをもって、前者を英語の亜流としては扱えないと同様、クレオールの語句や文の構造を真に理解するには、上層語の知識からのアプローチだけでなく、基層語の知識からも同時にアプローチする必要がある。上層語からみれば「規則を逸脱した構造」も、基層語から見れば「理に適った構造」ということが往々にしてあるからである。従って、以下のチャバカノ語の文法特性の解説も、スペイン語とタガログ語両方の文法の観点に立っている。用例は Escalante (2005, 2010) および Romanillos (1999:1-7)に拠った。

3.4.1 音韻・音声的特性

母音には音素として /a/、/e/、/i/、/o/、/u/ の 5 つがあるが、強勢がない場合の音声は [e]は[i]、[o]

は[u]になる傾向が見られる。なお、正書法が確立されていないために、スペイン語のつづりに従って書く人もいれば、発音通りに書く人もいる。二重母音[ie]には、個人語レベルで先行の鼻音/m/、/n/、/ɲ/、歯茎側面接近音/l/、歯茎破裂音/l/および軟口蓋破裂音/k/と結びついて口蓋音化する場合としない場合のゆれがある。

(37) comida [ko'mida][ku'mida] = cumida[ku'mida]

食べ物

(38) Tiene ['tieni]['cjeni]

持っている、(が) ある

Quiere ['kiere] ['kjeri]

したい、(が) 欲しい

子音は、歴史的にはヌエバ・エスパーニャ副王領（現メキシコ）のスペイン語と同じである。そのため軟口蓋摩擦音/x/は弱められて声門摩擦音[h]となる。これはまたタガログ語にもともとある音素/h/とも一致する。摩擦歯音/θ/はタガログ語にない子音なので、すべて摩擦歯音[s]になるはずであるが、スペイン直接統治時代のスペイン人またはスペイン市民戦争を逃れてきた人々との接触により、あるいは20世紀半ばまでスペイン語が学校の必修科目だったことにより、脱クレオール化が起きて[θ]と発音される場合もある。また、ll-はメキシコのスペイン語の/j/ではなく、現代はスペインですら一部でしか使われなくなった硬口蓋側面接近音の/l/で発音される。

(39) hijo ['ihu] cepillo [si'piɫu]

息子 ブラシ

3.4.2 語彙的特性

文法上の性がないため、語源のスペイン語では女性名詞であっても冠詞や形容詞には男性形が用いられる。また、複数形がないため名詞と冠詞・形容詞の間で性数の一致が行われず。複数の概念はタガログ語の複数小辞 mga [ma'na]を名詞に前置して表す。ただし、慣用的に複数形が用いられるものには-sまたは-esを語末に付加する。同様に女性形になる場合も慣用に従っている。

(40) el mga mujer guapa / el mga Filipino

冠詞 複数小辞 女 美しい 複数小辞 フィリピン人

el manga sabroso / el mangas

マンガー おいしい 片(両) 袖

形容詞はタガログ語と同じく、リンカーlinkerである ng [nan]で結ばれて畳語となり、muyと同様に程度の「強さ」を表す。また、タガログ語と同じく、形容詞と副詞の間には形態上の差がない。また、動詞の不定相の語源であるスペイン語不定詞の語尾-rは常に脱落する。

(41) dulceng-dulce = muy dulce

とても甘い

(42) Estudia tu bueno para pasa.

勉強しなさい 君は よく ために (試験に) 通る

3.4.3 人称代名詞

人称代名詞は以下の通りである。スペイン語では1、2人称においては「強調」のニュアンスがなければ、また3人称では言及先を明確にする必要がなければ、主語人称代名詞は省略されるが、無人称構文でない限りタガログ語と同じく常に文中に生起する。

	単数	複数
1 人称	yo	Nisos
2 人称	tu vos (蔑称) usted	vusos ustedes
3 人称	eli または ele	ilos または elos

(43) Ya buta ya yo el lata de sardines.

完了相小辞 捨てる もう 私は 冠詞 缶詰め の 鰯

3.4.4 動詞部のシステム

3.4.4.1 連繫辞ゼロと語順

タガログ語にはヨーロッパ諸語に不可欠な連繫辞、すなわち *ser* や *estar* は存在しない。従ってチャバカノ語にも存在しない。いわゆる補語にあたる語を主語に先行させるが、タガログ語のように主語を強調したいときには倒置させる。

(44) Nuevo pa el coche de mi tio.

新しい まだ 冠詞 車は の 私の おじ

(45) Mi tia el madrina mio de mi bautiso.

私の おばが 名付け親 私の の 私の 洗礼

(46) No tiempo de mani ahora

否定辞 時期 の ピーナッツ 今は

3.4.4.2 一般動詞の相と語順

一般動詞はタガログ語と同じく、次の4つの相により、ヨーロッパ諸語で言う時制と法が表現される。構造は単純で複合時制も再帰動詞もない。相の違いは小辞を伴うか伴わないか、伴うなら小辞はどれかにより表わされる。

i) 「不定相」：不定詞に相当し、中立状態を表す。時間の概念がない。

小辞なし。

形態は不定詞の語尾-rを消去した形。

タガログ語と同じく、2人称代名詞と共に用いて命令法を表す。

ii) 「完了相」：もう終わった行為や状態を表す。

小辞 ya+不定相

iii) 「未完了相」：まだ終わっていない行為や状態を表す。

小辞 ta+ 不定相

iv) 「未然相」：これから行う行為やこれから成る状態を表す。

小辞 di+不定相

語順は、タガログ語と同じく動詞が主語に先行するが、タガログ語ほど厳格でない。主語なり目的語なりを強調したい場合にはこれらが動詞に先行する。

直接目的語にも間接目的語にも前置詞 con が共に用いられる場合が多い。再帰動詞は存在しない。行為の様態を細かく表現するために、タガログ語の接頭辞や接尾辞を不定相に付加することもある。

(47) Para ya tu!

やめなさい もう 君

(48) Ta dale leche y carne con nisos el mga vaca..

不完了相小辞 与える ミルク と 肉 に 私たち 冠詞 複数小辞 牝牛

(49) Tarde ya cuando eli ya parece.

遅い もう する時 彼(女)が 完了相小辞 現れる

(50) Di queda cocido el mamon na diez minuto.

未然相小辞 になる 調理された 冠詞 ケーキ 以内に 10 分

(51) Di mangmirahan ilos na miercoles

未然相小辞 反復・習慣表現接辞+会う 彼らはに 水曜日

3.4.4.3 存在詞と疑似動詞

タガログ語には、存在詞と呼ばれる所有、存在、位置を表現しながら、動詞とも形容詞ともつかない独特なカテゴリーが存在する。¹⁶動詞ではない理由は相による活用がないからで、形容詞ではない理由は名詞を修飾しないからである。一方、疑似動詞というのは、英語では can must should などの助動詞や like (to), be fond of, hate (to) などの動詞(句)、スペイン語ならすべて deber, gustar, poder, tener ganas de などの動詞(句)が担う、行為の意味表現に用いられる動詞である。これもまた存在詞と同様、活用しない。

チャバカノ語にも相によって活用しない動詞がいくつか存在する。その文法機能はタガログ語の存在詞や疑似動詞とはほぼ同じである。形態上の特徴は、クレオール言語 lexifier であるスペイン語の deber, estar, poder, querer, saber, tener そして haber の直接法 3 人称現在形単数をそのまま用いるところにある。そのうち está は省略形の ta が使われ、場所の副詞 aquí (ここ) allá (あ

¹⁶ 浩瀚なタガログ語・英語辞書 Vicassan's Pilipino-English Dictionary(1978)にも、フィリピン諸言語開発センターなどの編纂によるタガログ語・タガログ語辞典 *Diksyunaryo ng Wikang Filipino* にも動詞として分類されている。おそらく、体言・用言などの文法概念を生んだ日本の国語学にあたるものがなく、英語の文法に準じて分析してきたためと思われる。Schachter and Otnes (1972:399-400)は「所有・存在動詞構造 possessive and existential verbal construction」という名称で分類し、「所有・存在形容詞構造 possessive and existential adjectival construction」に大変近いと述べている。Cubar and Cubar(1994:155)は明確に「存在動詞 existential verb」と「所有動詞 possessive verb」というカテゴリーを設けている。和泉(1982:53-55)は「能動詞」と命名しているが、能格言語の能格動詞 ergative verb や、受動態が作れるか作れないかで所動詞と対比させる日本語学の能動詞と混同されやすい。いずれにしても、他の動詞と違い、相による活用がないので、大上(1994:88-91)による「存在詞」という名称が最も相応しいと思われる。

そこ) と結びついて *taquí*、*tallá* となる。*no hay* も一体化し、母音変化を経て *nuay* となる例も見られる。不定相 *pode*、*quere*、*tene* は他の一般動詞と同じく小辞を伴って活用することも可能である。*debe* はスペイン語 *deber* と違って前置詞 *de* を伴う。面白いことに、タガログ語の疑似動詞 *gusto* はスペイン語の *gustar* を語源としているのに、チャバカノ語の *gusta* は一般動詞であって、疑似動詞ではない。また、願望をあらわ疑似動詞にタガログ語の *sana* と *baka* が入っているのも興味深い。以下がチャバカノ語の存在詞と疑似動詞である。

i) 存在詞：① 存在そのものを表す。

hay ((が)いる・ある) *no hay* または *nuay* ((が)いない・ない)

② 位置を表す。

ta ((は) いる・ある)

③ 所有を表す。

tiene / 小辞+*tene* (持っている、(が)いる・ある)

ii) 疑似動詞：① 義務を表す。

debe de (しなければならない) *tiene que* (同)

② 可能を表す。

puede / 小辞+*pode* ((条件が整って) できる)

sabe ((方法を知っていて) できる)

③ 願望を表す。

quiere / 小辞+*quere* (欲しい、したい)

sana (すればよいのに)

④ 推量を表す。

baka quiere (したいのではないか)

(52) *No hay gente na casa ahora.*

いない 人が に 家 今

(53) *Ta na derecha de tuyo el comedor.*

ある に 右 の 君 冠詞 食堂は

(54) *Tiene eli mucho debe.*

ある 彼(女)は たくさんの 借金が

(55) *Debe de reza nisos con Dios.*

しなければならない 祈る 私たちは に 神

(56) *No sabe yo maneja el coche.*

できない 私は 運転する 冠詞 自動車

(57) *Sana veni ustedes temprano.*

すればよいのに 来る あなた方が 早く

(58) *Baka quiere ilos retira temprano.*

したいのではないか 彼(女)らは 家に帰る 早く

3.5 カビテ語とテルナテ語の現状

3.5.1 Lesho and Sippola (2013)の調査報告

UNESCO の *Language Vitality and Endangerment* (2003 : 17)は、言語消滅の危機状況を段階的に示すために以下の9つの評価因子を示し、それぞれの結果について、最も安定しているレベル6 から消滅のレベル0まで6段階の評価を付けるフォーマットを作成した。Lesho and Sippola (2013: 9-22) は、これらの基準をカビテ市とテルナテに適用して、2003年から2012年までの9年間、断続的に長期にわたる言語調査を行った。調査対象話者はカビテ市で44人、年齢は20歳から87歳で、そのほとんどが50歳以上だった。テルナテでは54人で年齢は11歳から87歳だった。以下は、その詳細な結果を筆者が表にまとめたものである。二人の評価は因子ごとに示した。

	Cavite City	Ternate
第1因子 (言語の世代間継承)	世代間継承がなく、消滅の危険度が高い。	世代間継承があるため、危険はあるが安定している。
	2	5-
第2因子 (話者の絶対数)	・1995年の Romanillos の調査結果では3316人。 ・2007年度統計局発表では7000人。	1995年度統計局発表では3192人。
	/17	
第3因子 (全人口に占める話者の割合)	・1995年の Romanillos の調査結果では3%。 ・2007年度統計局発表では全人口10万1120人のうち7%。	1995年度統計局発表では全人口の22%。
	1	2
第4因子 (既存の言語使用領域に見られる傾向)	宗教行事や式典における挨拶や標語、祭りの命名など公的な性格が見られる。	家族、友人、仕事仲間など内輪での使用。 タガログ語と併用。
	1	3+
第5因子 (新たな使用領域および媒体への対応)	両地域共にテレビやラジオでは使用されない。 機関誌の発行およびインターネットのサイトや新聞のコラムへの寄稿を通じて発信。	
	1	2

¹⁷ この因子については危険度レベルの数値ではなく、話者の概数を記入している。UNESCOの解説も絶対数を正確に把握するのは無理との前提に立っており、評価基準のコメント付きフレームも省略されている。Lesho and Sippola (2013: 24) および UNESCO(2003: 8)

第6因子 (言語教育および識字育成用の教材)	<ul style="list-style-type: none"> ・教室での補助言語として公式に認められたが、学童からの需要がほとんどなく、教師も教材も不足していた。 ・個人が教科書を編んだり、民間団体がチャバカノ語辞書を出版したり、チャバカノ語塾を立ち上げたりしたが、運営者の高齢化や死去により現在は存在しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チャバカノ語に関する団体はない。 ・個人がチャバカノ語に関する本を出版した。
	2+	2
第7因子 (政府や組織の言語に取り組み姿勢と政策、言語の公的地位と使用を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・チャバカノ語が宗教行事にも関係があるため、ある程度社会的評価が高い。 ・数年前に前市長が教育省に対し国立カビテ高校のカリキュラムにチャバカノ語学習を取り入れるよう要請。2011年に市長提案のチャバカノ語復興促進条例を市議会が満場一致で可決。 	マラゴンドン Maragondon にある町のゲートに、チャバカノ語で歓迎の言葉を標記。
	4	3
第8因子 (地域住民の自らの言語に対する姿勢)	チャバカノ語の保護育成を支持する人が多い一方で、無関心を隠さない人も多い。	チャバカノ語は、フィリピン上流社会を表象するスペイン人とのつながりを想起させるので、高く評価する一方、貧しい人々の言語だという意識もある。
	2~3	2~3
第9因子 (文献の質と量)	両地域共に多くの研究者の関心を呼び、研究成果が出ている。	
	2	2

この調査結果から窺えることは、カビテ語はテルナテ語に比べて消滅の危険度が極めて高いということである。学校教育の場でチャバカノ語を第一言語とする子供のために補助言語として取り入れられたが、教材も教員も不足している状態で、何よりも学童のほうからの需要がなかった。個人

レベルで教科書が編まれるなど、一時は盛り上がった民間の言語保護育成運動も運営する人が高齢や死去のために活動が急激に下降している。しかし、市長自らが先頭に立って復興促進条例を制定させたので、青少年の教育の現場に明るい兆しが見られそうである。テルナテ語の存続に関して、最も期待できるのは世代間で言語の継承が確実に行われているということである。少なくとも家族、友人、仲間など内輪の使用領域が存続する限り、当分の間は消滅しないであろうと予測される。

3.5.2 英語のチャバカノ語への影響

3.5.2.1 カビテ市とテルナテにおける現地調査

2016年2月、同年5月、同年10月の3回に分けて、カビテ市とテルナテで、英語がどの程度チャバカノ語に影響を与えているかの調査を行った。日程等の詳細は以下の表に示した通りである。第1回目は他の研究テーマによる現地調査から17年もの歳月が経っていたため、調査協力者へのコンタクトの再構築にほとんどの時間を割かなければならず、本格的な調査は第2回目と第3回目で行った。

第1回調査	2016年2月7日～17日	Cavite City
	<ul style="list-style-type: none"> ・数日をかけて故 Ñora Puring の家族を探し当てる。 ・故 Ñora Puring の家族の協力を得て人脈を少しづつ広げる。 ・チャバカノ語研究家 Enrique R. Escalante 氏が2014年に他界していたことを知らされる。次回に氏の遺作となったカビテ語入門書が入手できるよう手筈を依頼した。 ・音声資料を入手するため、人伝で数人に協力を仰ぎ次回のアポイントメントをとった。 	
第2回調査	2016年5月22日～28日	Cavite City / Ternate
	<ul style="list-style-type: none"> ・テルナテ語研究家で著作もある Evangelino Nigoza 氏を氏が校長を務める Cavite West Point College に訪ねて久闊を叙してから、次回に音声資料収集のための協力人員の手配を依頼。 ・前回に協力を依頼した Jose dela Rosa 氏ほか数人のカビテ語の自由会話を音声と映像の両方で記録。 ・故 Escalante 氏がカビテ語で書いた故 Ñora Puring への哀悼の頌歌を含む数枚の資料を、市観光局課長 Remedios Ordoñez 女史より恵贈される。 ・故 Escalante 氏の遺作を人伝に入手する。 ・17年前に自著を恵贈下さったフィリピン大学の Emmanuel Luis A. Romanillos 教授とは所用のため再会できず。 	
第3回調査	2016年10月21日～26日	Cavite City / Ternate

	<ul style="list-style-type: none"> •dela Rosa 氏と Almario P. Atanacio 氏の協力の下、やや離れた 2 つの地区で、それぞれ 16 名と 7 名の自由会話を音声と映像の両方で記録する。少年を含む 3 世代間でカビテ語を伝えている家族を紹介され、音声と映像の両方で記録する。 •テルナテに Nigoza 氏を再訪。脳梗塞の後遺症が前回より更に進行し、言語不明瞭の状態にあり、十分なインタビューが不可能。人数もこちらの意図が十分伝わってなく極僅か。氏からは自著の貸与を受ける。
--	--

音声および一部映像データの採取方法は、チャバカノ語の母語話者に集まってもらい、自由なテーマの会話を採録し、その中から英語が混ざる個所を抜き取って分析する方法を採った。カビテ市では 40 歳代 2 名、50 歳代 5 名、60 歳代 11 名、70 歳代 6 名、80 歳代 1 名、90 歳代 1 名の男女計 26 名、テルナテでは 70 歳代 2 名、50 歳代 1 名、40 歳代 1 名、20 歳代 1 名の男女計 5 名の協力者を得た。録音時間は。カビテ市では 4 か所で収録、延べ 2 時間 18 分 56 秒、テルナテでは 1 か所で収録、13 分 37 秒であった。

3.5.2.2 データの分析と結果

採録の当初は、日常生活から町の歴史や料理、高齢者が多いため思い出話など、いくつか話題を提供したが、時折英語ないしタグリッシュへのランゲージ・シフトはあっても、英語が語彙レベルで混ざる発話が出てこなかった。そこで、この数年で急激に普及した携帯電話について話題を振ると、ようやくいくつか英語語彙が入り込むようになった。以下は採録した発話の中で英語の混在がみられた発話の全てである。同じ語彙が含まれる発話は除外し、カビテ語とテルナテ語に大別して英語の品詞ごとに分類し、該当個所には下線を施した。ただし、一文中に異なる品詞の例が含まれているものもある。

i) カビテ語

①名詞

(59) Ese ta llama conmigo loud speaker sin parar.

そいつは 呼ぶ 私を 止まらない

(60) June sixteen, mismo birthday di mio.

まさに 私の

(61) Peanut and rice ta haci yo aquel pagkatapos, ta manda a hace giling.

作る 私がその 後で 命じる するように 米を挽く

(62) Cuanto veses yo ya hace ya ese action.

何度も 私は した その

(63) Coffee ya lang na un vaso

もう だけ の中には コップ

(64) Baka subi di mi sugar

多分 上に行く のことで 私の

(65) Cosa el text or cosa el message del cellphone?

何 何 の

(66) Tiene yo rin mga chabacano, el kopya del mga poem
持っている 私は も 複数小辞 コピーを の 詩
di Eliodoro Ballesteros.

の

(67) American at saka Filipina el mujer.

アメリカ人 で フィリピン人 奥さん

②数詞

(68) Dale seven days lang ilo aqui.

与えている だけ 彼らは ここで

(69) Ya hace apply yo sixty five.

なった 私は

③形容詞

(70) El cuerpo bunito, sexy.

体形が きれい

(71) Kaya O.K. lang, alegre ya naman.

だから ただ 喜んで もう こちらも

(72) Aqui el lugar de mga pobre, kasi aqui depressed area.

ここは 場所 の 複数小辞 貧乏人 だから ここは

(73) Willing man ilo ta trabaja.

やる気のある人 彼らは 働いている

(74) No more merienda.

おやつ

(75) Working Lola.

ローラは

④副詞

(76) Kaya aquel el trabajo di mio, aquel el business, therefore.

だから あれが 仕事 私の あれは

(77) First ba el merienda bago el conversacion?

疑問小辞 おやつ の前に 会話

(78) Anytime quiere llama cuntigo tuyu mujer, donde tu talla.

したい 電話する 君に 君の 奥さん どこに 君が しようと

⑤前置詞句

(79) During first week del month ta cuci yo tamalis
の 料理する 私が タマーレを

(80) Llama tu otra vez after one hour.
電話する 君は もう一度

⑥動詞

(81) Avirigua di ibig sabihin, di esi explain you contigo.
調べなさい について 言いたいこと について そのこと 自分に

(82) No pwede ilos man-translate na chabacano aquel, que ta usa ya
できない 彼らは に あれを だから 使っている もう
aquel mga English words.
あの 複数小辞

⑦動詞句 hace + N 構造

(83) Na iglesia ilo ta haci serve.
で 教会 彼らは している 奉仕活動

(84) Dale bo muna bago bo hace check.
あげて君は まず君が 前に チェックを入れる

(85) Ta hace manicure alli na mga elementary teacher.
マニキュアをする あそこ

(86) Ya hace ele interview cumigo para cuci bakalaw.
した 彼(女)は インタビュー 私に ため 料理する 干鱈を

(87) Aquel qui hace ka-partner.
あの人 関係代名詞 している 接頭辞 (仲間を表す)

⑧ランゲージ・シフト

(88) El government, el gobierno provided cun eso as department head cellphone.
政府は を それ

(89) Tiene nisos telepono dos. Yo no cellphone, mi hermana tieni.
持っている 私たちは 電話を 2台 私は 私の 姉妹 持っている
I don't know how to use it. I want to learn it, but, who will teach me? Nobody.

(90) Como yo, I am senior citizen, pero nuay yo.
のように 私 しかし 持っていない 私は

ii) テルナテ語

①名詞

(91) Ta prigunta eli si di sirvi quel Bahra na cellphone.

訪ねている 彼は かどうか 将来役立つ その テルナテ語が で

(92) Omey pa ta hace cunmigu text, masqui no SMS, masqui quel

オメイは まだ 作っている 私と ではないが ではないが その

message lang.

だけ

対象者および収録時間の少なさを勘案しても、カビテ語はテルナテ語に比べて圧倒的に英語の影響が少なく、英語の混在も名詞に限られているのは、テルナテ語のほうが存続の危機が薄いこと、すなわち小さな閉鎖的な町で外部の人間と接する機会がカビテ市に比べて少ないだけでなく、対象者たちがテルナテ語をアイデンティティとして強く意識し、後述するカリスマ的存在の人物を軸に、強固な保護運動グループを結成していることに関係している可能性もあながち否定できない。一方、カビテ市は市庁所在地であり、マニラ首都圏とマニラ湾を隔てて互いに遠望できる距離にあり、住民もタガログ語話者がほとんどである。そのため、言語環境はマニラ市内とほぼ変わらず、その分、英語やタグリッシュに接する機会が多い。このことから様々なパターンの混在が見られた可能性が高い。いずれにしても、今回得られたデータから文法上の事象について次のことが判明した。

- i) 英語またはタグリッシュとの接触が、チャバカノ語の文法構造に与える影響は、少なくとも今回のデータに限って言えば、まったく見当たらない。
- ii) 英語の名詞の混在が最も多く、そのうちの一部は動詞 **hace** (する) と結びついて動詞句を形成する。
- iii) 数詞の読み方は、スペイン語あるいはタガログ語のスペイン語語源の数詞の読み方よりも英語の数詞の読み方が好まれる。
- iv) 英語の形容詞が導入される時は英語の名詞を伴い、チャバカノ語の語彙を修飾することはない。
- v) 進行形の BE 動詞は連繫辞として解釈され、チャバカノ語には連携辞がないため脱落し、現在分詞のみ形容詞の叙述用法として受け入れられる。
- vii) 副詞および前置詞句はチャバカノ語の文法に従い、文頭または文末に置かれる。
- viii) 動詞は相小辞 (**ya**, **ta**, **di**) を伴って主動詞となることはなく、不定詞としてのみ導入されるか、その部分のみ英語の主語を伴って部分的にランゲージ・シフトする。
- ix) 導入された名詞や動詞には、チャバカノ語場合と同様に、自由に接辞を付けてさまざまなニュアンスを加えることができる。

全体を通して予想以上に英語の影響が少ない理由として 2 つのことが考えられる。まず、タガログ語寄りのタグリッシュの場合は、Thompson (203:144-149)が指摘するように、タガログ語の焦点シ

システムに抵触しないためのさまざまな工夫が行われるが、チャバカノ語は形成の長い歴史の中で、基層語であるタガログ語の主語焦点機能と格標識、および動詞への複雑な義務的接辞付加システムを捨てているので、スペイン語と同じヨーロッパ語の英語と接しても、かつての上層語であるスペイン語に対してと同様に、単なる語彙供給言語 *lexifier* として向き合っているに過ぎない。つまり、自己の文法に深刻な影響を与えないための装置はすでに構造の中に備えているということである。もう 1 つの理由は、学校教育を通して英語が広く行きわたっただけでなく、テレビや映画、ビデオはもちろんのこと、インターネットの急速な発展普及により、パソコン、SNS、フェイスブック、ツイッターなどの媒体を通じて、いわゆる正統派の英語に即座に容易に接することができ、英語運用能力を維持しやすいという点があげられる。そこが、系統だったスペイン語教育を行わず、現場におけるタガログ語話者とスペイン語話者との拙い意思相通の積み重ねに任せ、クレオールが生まれればそれで十分としていた時代とは、大きく異なる点である。仮に、学校教育もテレビやインターネットなどの科学技術もない時代に、上層語としての英語に接し、日々の糧を得るために何とか英語話者と意思疎通を図らなければならない状況に追い込まれていたなら、それなりの影響がチャバカノ語の文法構造に現れていたであろう。しかし現代は社会的状況がまったく異なり、チャバカノ語ないしタガログ語で意思疎通ができなければ、英語ないしタグリッシュにランゲージ・シフトすれば良く、わざわざ自分たちの言語であるチャバカノ語を英語化してまで意思疎通を図る必要などないのである。つまり、チャバカノ語にとって英語とは、単なる *lexifier* に過ぎず、英語以外に対象を表現する用語がない場合を除き、発話を彩る一種の装飾品のような存在であるといえよう。

3.5.3 チャバカノ語復興運動の顛末

筆者が 92 年から 99 年まで断続的に行ったフィールドワークを支え、様々な人脈を開拓して下さり、貴重な資料を集めて下さった人物は、チャバカノ語話者で元小学校教員のプリフィカシオン・バリエステロス Purificacion Ballesteros 老夫人であった。父親がカビテ市出身の著名なチャバカノ語の詩人、エリオドロ・バリエステロス Eliodoro Ballesteros であるだけでなく、ご自身の社交的な性格から幅広い人脈を持ち、町の誰からも「ニョラ・プリン」Ñora Puring (プリンおばさん) と慕われていた。夫人は熱心なチャバカノ語普及運動家であり、最初に引き合わされたのがチャバカノ語研究家のエンリケ R. エスカランテ E.R. Escalante 氏であった。2007 年に研究とは別にフィリピンを訪れる機会があり、ニョラ・プリンを初め研究に協力してくれた人々のもとを挨拶して回った。その折に、エスカランテ氏は 2 年前に出版したというチャバカノ語に関する本を下さり、次作の草稿を見せながら熱心に構想を語っていた。それから 9 年の月日が流れ、今回再びカビテとテルナテを訪れることとなったが、その間に、ニョラ・プリンは鬼籍に入り、その家族とも次第に連絡が取れなくなっていた。エスカランテ氏とはたまにメールのやり取りをしたが、2013 年頃から返信が来なくなり心配していたが、今回の調査で 2014 年に氏も鬼籍に入っていたのを初めて知ったのである。

久しぶりに現地調査をして見えてきたことは、Lesho and Sippola (2013) が出たころを境に、カビテ語もテルナテ語も民間の大きな推進力を次々に失ったという厳しい現実であった。その意味で、二人の長年にわたる現地での調査研究の集大成は、滅びゆくマニラ湾沿岸部のチャバカノ語への最後のオマージュであり、残照の輝きを言語史の一頁に留めた功績は極めて大きいと言える。ニョラ・プリンは、カビテ市内の様々なカビテ語復興運動家たちの橋渡し役として、老齢とは思えない縦横

無尽の活躍をし、リプスキをはじめ世界各地から研究者がフィールドワークに訪れたときは、有能なアテンダント役として心から調査を支えた。ニョラ・プリンとは母親の代からの親しい友人であるエスカランテ氏は、カビテ語入門書 1 冊と用例と簡単な文法解説付きのチャバカノ語辞書 1 冊を出版し、地方紙 *Operation Exposé* に毎週チャバカノ語のコラムを寄稿するなどの文筆活動のほか、民間のチャバカノ語保護育成運動団体であるカビテ市チャバカノ語協会 *Asociacion Chabacano del Ciudad de Cavite* の一員として活躍し、チャバカノ語の語学学校であるエスクエラ・チャバカノ *Escuela Chabacano* まで創設した。¹⁸チャバカノ語教育におけるエスカランテ氏の先駆者は、元小学校教員のノルマ・カストル・ベルサベ *Norma Cástor Bersabe* 女史であった。女史は手書きやタイプで打ったカビテ語の教科書を数冊作り、希望者を募っては洋裁学校の一角を借りてカビテ語教室を開いていた。女史もまたニョラ・プリンの親しい友人だったが、物故して 10 年以上になる。21 世紀に入って一時勢いのあったカビテ語復興運動の一環として、地元のマヌエル・ロハス *Manuel Rojas* 小学校で成人だけを相手にカビテ語教室を開いていた元小学校教員のソレダー・サンタ・アナ *Soledad Santa Ana* 女史が使っていたのも、ベルサベ女史が残した手作りの教科書だった。出版関係で忘れてはならないのは、同じくニョラ・プリンの年来の友人であるデラ・ロサ *dela Rosa* 夫妻の存在である。夫のホセ・デラ・ロサ *Jose dela Rosa* 氏はカビテ市チャバカノ語協会会長の経歴を持ち、協会から編者数名と一緒にチャバカノ語辞典を出版した。今回の調査でも惜しみない協力をしてくださり、氏の発話も映像を含めて収録することができた。妻のジョスリン・デラ・ロサ *Jocelyn dela Rosa* 女史はカビテ市立図書館長を長年務め、在職中に図書館のウェブサイトを立ち上げて、2003 年から 2010 年まで *Aviso* というメールマガジンを発信し、毎号必ずチャバカノ語のコラムを載せては言語の広報に努めた。夫妻は存命であるが、復興運動からはすでに退いてしまっている。

他方、テルナテ語の復興を推進してきたのは、テルナテの町はずれにあるカビテ・ウエスト・ポイント・カレッジ *Cavite West Point College* の校長、エバンヘリーノ・ニゴサ *Evangelino Nigoza* 氏である。テルナテ語の研究者であり論文や著書もある氏は、バラングイの中心人物であり、その求心力は往時は非常に大きかった。残念ながら脳梗塞で倒れてからは発話に障害を持つに至り、以前のような精力的な活動は影を潜めてしまった。しかしながら、現職にあり、周囲には常に人が集まるカリスマ的存在なので、氏を主催者とし、弟子たちが幹部を務めるテルナテ語の保護育成団体、シルコロ・デ・マルディカス *Dircolo de Mardicas* を介して復興運動は継続されていくものと思われる。因みに、彼らはテルナテ語の呼称をスペイン語のテルナテーニョ *ternateño* ではなく、土地の呼び方であるバーラ *Bahra* と呼ぶことを主唱している。

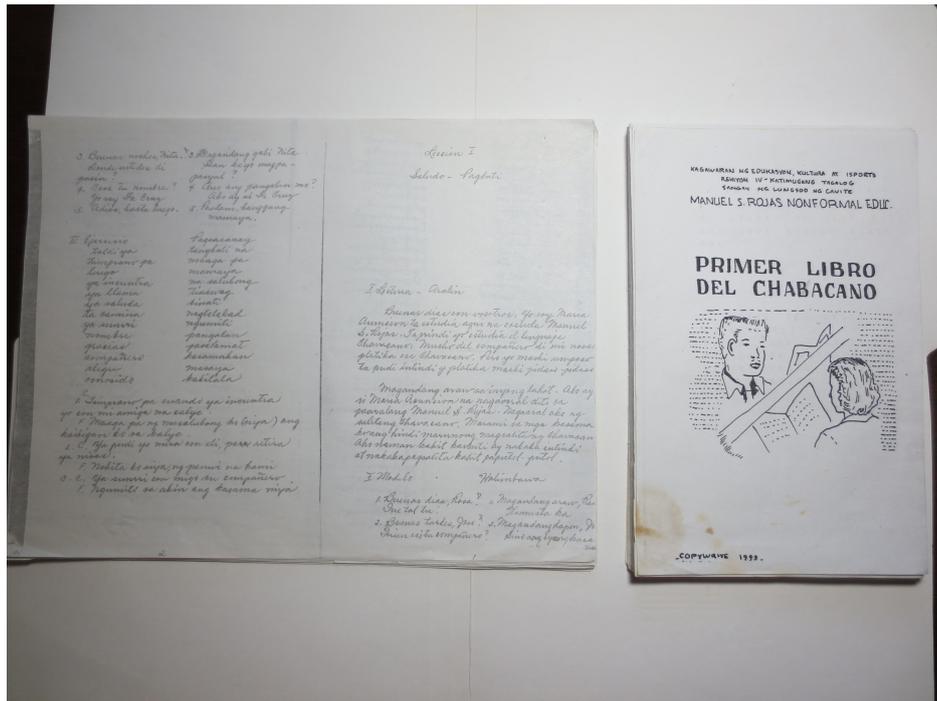
¹⁸ 2017 年 10 月現在、この学校は閉校となっている。



エスカランテ氏がニョラ・ブリンに捧げたカビテ語で書かれた哀悼の頌歌



右と中央：エスカランテ氏の入門書 左：カビテ市チャバカノ語協会編の辞書



ベルサベ女史の手作りのカビテ語教科書。左は手書き、右はタイプライターによる。

4. 結び

フィリピンでは、多くの国内少数言語が存続の危機を迎え、すでに消滅して死語となった言語も少なからずある。まさにその瀬戸際にあるのが、マニラ湾沿岸部のチャバカノ語であるカビテ語とテルナテ語である。1957年にフィリピン政府が、土着言語で授業を行うのは、タガログ語と英語のバイリンガルによる教育への過渡的橋渡しとしてであって、小学校の1年生と2年生に限ると制定して以来¹⁹、まだ必修科目だったスペイン語を除くその他の国内の言語への風当たりが強まったからである。

そうした中、弱小言語にわずかに希望の光が差し込んだ。2001年に当時の教育文化スポーツ省長官が制定した、フィリピン語教育と英語教育よりも前に、各地の土着言語の *lingua franca* を用いて識字能力を高める制度である。²⁰このおかげで、例えば2012年度は「母語に基づく多言語教育」(MTB-MLE: Mother Tongue Based-Multi-lingual Education) プログラムにより、タガログ語だけでなく、カンパンパンガン語、パナガシナン語、イロカノ語、ビコール語、セブ(ビサヤ)語、ヒリガイノン語、ワライ語、タウスグ語、マギンダナオ語、サンボアンガ語の11の土着言語による教育が、幼稚園から小学校3学年まで全国で実施されたのである。²¹

それにもかかわらず、カビテ市では、今まで復興運動に熱心に取り組んできたチャバカノ語の母語話者が次々と舞台を去ろうとしている。彼らのリアルな運動に代わるものとして、インターネットのホームページ、ブログ、Youtube、フェイスブックなどを利用して、動画を発信するヴァーチャ

¹⁹ Anderson and Anderson (2007 : 128)

²⁰ Decker and Young (2005: 197)

²¹ DepEd order no.16, s.2012.

ルな方法がある。ただし、こうしたアプリケーションには大きな弱点があり、事態を難しくしている。よほど頻繁にアクセスしない限り、Google や Yahoo などでは遙か後ろのページに追いやられてしまうのである。特に動画は短命で、実際に、2 年前までは簡単にアクセスできた故エスカランテ氏の作成したチャバカノ語動画はすでに消去されている。

言語は日々使われる領域を失うと死滅する。しかし、死語への道を辿り始めている言語も社会的な力を持つことがある。その言語がアイデンティティーのよすがとして意識された時である。遠い先祖から代々受け継がれてきた言語が目の前で死にかけており、自分にはすでにその言語の運用能力がない状態の中で、その言語が次代に継承されるように努力するか否かは、頗る文化的な問題である。行政からの支援があったとしても、いわば「容器」であり、そこに容れる「コンテンツ」は支援を受ける者が選ばなければならない。未だ命ある言語を過去の遺物として博物館のように展示するのか、それとも水族館や動物園のように命ある存在として扱って来訪者を取り込むのか、その言語の母語話者に限らず、言語が育まれてきた地域に住む住民一人一人が、アイデンティティーをキーワードに考えるべきテーマである。そのヒントともなろうものが、地元カビテ市のマクドナルドのトイレのドアにあった。カビテ語で書かれた「男」と「女」であるが、単に目で読む文字ではなく、発音記号が付いている。声に出して読むとき、言語は受動から能動へと切り替わる。



左側が「女性用」で右側が「男性用」。英語とカビテ語で併記し、それぞれに発音記号に似せたものが付してある。(2016 年 10 月 25 日 Cavite City の McDonald's にて筆者が撮影)

【参考文献】

- Alic Go, Mikhail and Gustilo, Leah (2013). "Tagalog or English: the Lingua Franca of Filipino Urban Factory Workers", *Philippine ESL Journal*, Vol, 10., ELE Publishing, pp.57-87.
- Anderson, Victoria B. and James N. Anderson. (2007). "Pangasinan—An Endangered Language? Retrospect and Prospect", *Philippine Studies*, 55(1), University of Hawaii, pp.116–144.
- Asociacion Chabacano del Ciudad de Cavite (2008). *Diccionario Chabacano*, the Office of the City Mayor, Cvite City.
- Bautista, Maria Lourdes S. (2004). "Tagalog-English Code Switching as a Mode of Discourse", *Asia Pacific Education Review*, Vol. 5, No.2, 226-233.
- Crystal, David (2000). *Language Death*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Cubar, Nelly I. and Cubar, Ernesto H. (1994). *Writing Filipino Grammar: Traditions & Trends*, New Day, Quezon City.
- Dayag, Danilo T. (2012). "Philippine English", in E-L Low and A. Hashim (rds.): *English in Southeast Asia -Features, policy and language in use-*, John Benjamins Publishing Company, pp.91-99..
- Dekker, Diane and Catherine Young. (2005). " Bridging the gap: The development of appropriate educational strategies for minority language communities in the Philippines". *Current Issues in Language Planning* 6 (2)., Routledge, pp.182–199.
- Department of Education, Republic of the Philippines (2012). "Guidelines of the implementation of the Mother Tongue-Based-Multilingual Education (MTB-MLE)". DepEd order no.16, s.2012. <http://www.deped.gov.ph/orders/do-16-s-2012>
- Escalante, Enrique R. (2005). *Chabacano...for Everyone-A Guide to the Chabacano Language*, Baby Dragon Printing Press, Manila.
- (2010). *Learning Chabacano - A Handbook-*, Baby Dragon Printing Press, Manila.
- Frake, Charles O. (1971). "Lexical Origins and Semantic Structure in Philippine Creole Spanish", *Pidgignization and Creolization of Languages*, Dell Hymes, pp.223-242.
- García Louapre, Pilar (1990). *El idioma español en Filipinas desde la conquista a nuestros días*, Editor S.A., Madrid.
- German, Alfredo B. (1932). "The Spanish Dialect of Cavite", Master's Thesis, University of the Philippines.
- Gonzalez, Andrew (1997) . "The history of English in the Philippines", in Bautista, M.L. (ed.) *English is an Asian Language: The Philippine Context*, Macquarie Library, ppp.25-40
- (1998)." The Language Planning Situation in the Philippines," *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, Vol.19, No.5&6, Routledge, pp.487-525.
- (2003). " Languagec planning in multilingual ccountries: The case of the Philippines", Conference on Development Language Revitalization and Mutlilingual Education in Minority in Asia, SIL, Bangkok. [http:// www-01. sil. org/ asia/ ldc/ plenary_papers / andrew_gonzales.pdf](http://www-01.sil.org/asia/ldc/plenary_papers/andrew_gonzales.pdf)

- Grant, Anthony (2013). “On the (dis)unity of the Manila Bay Creoles: some lexical strata in Ternateño”, *Revista de Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola*, 4, Associação de Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola, pp.26-47
- Holm, John (2001). “Chabacano versus related creoles: Socio-linguistic Affinities and Differences”, *Estudios de sociolingüística: Linguas, sociedades e culturas*, Universidade de Vigo, pp.69-94.
- 和泉 模久(1982). 『フィリピン語入門』、泰流社。
- Jones, M. (2004). “Some structural and social correlates of single word intrasentential code-switching”, *French Language Studies*, 15, Cambridge University Press, pp.1-23.
- Kirkpatrick, Andy (2007). *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*, Cambridge University Press.
- 小張 順弘 (2004). 「フィリピン多言語社会での言語とアイデンティティ-セブアノ多言語話者の事例から」、『言葉とアイデンティティ』、三元社。
- Lesho, Marivic (2013). “The Sociophonetics and Phonology of the Cavite Chabacano Vowel System”, dissertation, Ohio State University.
- Lesho, Marivic and Sippola, Eeva (2013). “The Sociolinguistic Situation of the Manila Bay Chabacano-Speaking Communities”, *Language Documentation & Conservation*, Vol.7, University of Hawaii, pp.1-30. <http://hdl.handle.net/10125/4547>
- (2014). “Folk Perceptions of Variation among the Chabacano Creoles”, *Revista de Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola*, 5, Associação de Crioulos de Base Lexical Portuguesa e Espanhola, pp1.-46.
<http://www.acblpe.com/revista/volume-5-2014/folk-perceptions-of-variation-among-the-chabacano-creoles>
- Linangan ng mga Wika sa Pilipinas, etc. (1989). *Diksiyunaryo ng Wikang Filipino*, Unang Edisyon, National Bookstore.
- Lipski, John M.(1985). “Creole Spanish and Vestigial Spanish: Evolutionary Parallels”, *Linguistics*, 23, Mouton de Gruyter, pp.963-984.
- (1987a). “Descriolización del criollo hispanofilipino ‘el caso de Zamboanga’”, *Revista Española de Lingüística*, pp.37-56.
- (1987b). “Modern Spanish Once Removed in Philippine Creole Spanish: The case of Zamboangueno”, *Language in Society*, 16, Cambridge University Press, pp.91-108.
- (1992a). “New Thoughts on the Origines of Zamboangueno”, *Language Sciences*, 14-3, Elsevier, pp.197-231.
- (1992b). “Origin and Development of ‘ta’ in Afro-Hispanic Creoles”, *Atlantic meets Pacific*, Creole Language Library, 11, John Benjamins, Amsterdam, pp.217-231.
- (2001a). “Chabacano/Spanish and the Philippine Linguistic Identity”, About the Philippines, unpublished. [https://aboutphilippines.ph/documents-etc/chabacano\[1\].pdf](https://aboutphilippines.ph/documents-etc/chabacano[1].pdf)
- (2001b). “The Place of Chabacano in the Philippines Linguistic Profile”, *Estudios de Socio-*

- lingüística*, Universidade de Vigo, pp.119-163.
- (2002). “When does ‘Spanish’ become ‘creole’ and vice versa? : the case of Chabacano (Philippine Creole Spanish)”, Colloquium on Hispanic and Luso-Brazilian Literatures and Romance Linguistics: Austin: University of Texas, unpublished.
<http://www.personal.psu.edu/jml34/Chabacano.PDF>
- (2003). “SpanishWorld-wide : the Last Century of Language Contacts”, invited lecture at Middlebury College, March 6. <http://www.personal.psu.edu/jml34/sww.pdf>
- (2009), “Philippine creole Spanish: assessing the Portuguese element”, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 104(1-2), De Gruyter Mouton, pp.25-45.
- Llamado, Librada C. (1972). “The Phrase-Structure Rules of Cavite Chavacano”, *Philippine Journal of Linguistics*, 3, Linguistic Society of the Philippines.
- Lorenzino, Gerardo A. (1993). “African vs. Austronesian Substrate Influence on the Spanish-based Creoles”, *Atlantic Meets Pacific*, Creole Language Library, 11, John Benjamins, Amsterdam.
- (2000). *The Morphosyntax of Spanish-lexified Creoles*, LINCOS Studies in Pidgin & Creole Linguistics, 2, Maruzen, Tokyo.
- Marasigan, Elizabeth (1983). *Code-Switching and Code-Mixing in Multilingual Societies*, Singapore University.
- Martin, Isabel Pefianco (2010). “Periphery ELT: the politics and practice of teaching English in the Philippines, in A. Kirkpatrick (ed.) *The Routledge Handbook of World Englishes*, Routledge, pp.247-264.
- Mckaughan, Howard (1954). “Notes on Chabacano grammar”, *Journal of East Asiatic Studies* 3, pp.205-226.
- Mercado, K. A. (2010). “A descriptive study on code-switching among grade 6 math and science teachers’ utterances”, Master’s Thesis, De La Salle University, Manila.
- Metila, Romylyn A. (2009). “Decoding the Switch: The Function of Codeswitching in the Classroom”, *Education Quarterly*, vol.67 (1), University of Philippines College of Education, pp.44-61.
- Miranda, Gervasio (1956). *El Dialecto Chabacano de Cavite*, unedited, Ciudad de Dumaguete, Negros Oriental
- Muysken, Pieter (2000). *Bilingual Speech: A Typology of Code-Switching*, Cambridge University.
- Nigoza, Evangelino (2007). *Bahra. The history, legends, customs and traditions of Ternate*, Cavite Historical Society.
- 大上 正直(1994). 『フィリピン語文法入門』、白水社。
- 荻原 寛 (1994a). 「フィリピンのスペイン語系クレオール、カビテ語における性数概念」、『長崎県立大学論集』第27巻第2・3号、長崎県立大学学術研究会、pp.479-96.
- (1994b). 「マニラにおけるスペイン語話者の現状について」、『調査と研究』、第25巻第1号、長崎県立大学国際文化経済研究所、pp.107-20.

- (1995). 「マニラ湾沿岸部のスペイン語系クレオールをめぐって-アスペクトとフォーカスを中心に」、*Hispanica* 39、日本イスパニヤ学会、pp.114-28.
- (1996). 「カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について」、『調査と研究』、第27巻第1号、長崎県立大学国際文化経済研究所、pp.1-18.
- (1999). 「マニラ湾沿岸部のスペイン語系クレオールの語順をめぐって」、『長崎県立大学論集』第33巻第2号、長崎県立大学学術研究会、pp.161-90.
- Ogiwara, Yutaka (2002). “Aparición del sustrato en el predicado del caviteño”, *Papia*, No.12, Associação Brasileira de Estudos Crioulos e Similares, Universidade de Brasília, pp.67-83.
- 小野原 信義 (2004). 「アイデンティティ詩論-フィリピンの言語意識調査から」、小野原信義+大原始子 (編著) 『言葉とアイデンティティ』、三元社。
- Pámparo Ramos, María Lourdes (1993). “La lexicografía bilingüe filipina durante la primera etapa de la colonización española (1521-1663)”, *Actas del tercer congreso de hispanistas de Asia*, Asociación Asiática de Hispanistas, Tokio, 1993, pp.316-317.
- Pérez, Mariola (2015). “Cavite Chabacano Philippine Creole Spanish: Description and Typology”, dissertation at University of California.
- Poplack, S. (1980). “Sometimes I’ll start a sentence in English y termino en español”. *Linguistics*, 18, Mouton de Gruyter, pp.581-618.
- Quilis, Antonio (1992) *La lengua española en cuatro mundos*, MAPFRE, Madrid.
- (1995). “El español en Filipinas”, C. Silva-Corvalán (ed.), *Spanish in Four Continents*, Georgetown University Press. pp.293-301.
- Romanillos, Emmanuel Luis A. (1996). “Rizal and Chabacano”, *Five Stories of Chabacano*, University of the Philippines. pp.1-17.
- (1999). *Cantos folklóricos y poesías de Cavite en chabacano y español*, Universidad de Filipinas-Dilimán, Ciudad de Quezon.
- (2006). *Chabacano Studies -Essays on Cavite’s Chabacano Language and Literature -*, Cavite Historical Society.
- Santos, Vito C. (1978). *Vicassin’s Pilipino-English Dictionary*, Revised Edition, National Bookstore.
- Schachter, Paul & Otones, Fe T. (1972). *Tagalog Reference Grammar*, University of California Press.
- 芝田 征二 (1990). 「第7章 フィリピンの英語」、本田信行編 『アジアの英語』、くろしお出版。
- Sibayan, Bonifacio P. (1978). “Views on language and identity: Limited Metro Manila example.”, in A. Yap (ed.) *Language Education in Multilingual Societies*, Singapore University.
- (1994). “The role and status of English vis-à-vis Filipino and other languages in the Philippines”, in T. Kandiah and J. Kwan-Terry (eds.) *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*, Times Academic

- Press, pp.218-41.
- Sippola, Eeva (2011). *Una gramática descriptiva del chabacano de Ternate*, tesis doctoral, Unigrafia, Helsinki.
- Steinkrüger, Patrick O (2008). “The Puzzling Case of Chabacano: Creolization, Substrate, Mixing and Second Contact”, *Studies in Philippine Languages and Cultures*, vol. 19. pp.142-157.
- Thompson, Roger M. (2003). *Filipino English and Taglish*, John, Benjamins Publishing Company.
- Tirona, Tomás T. (1924). “An Account of the Ternate Dialect (of Cavite P.I.)”, Tagalog Paper 487 of the Beyer's Collection, Philippine National Library,
- UNESCO (2003). *Language vitality and endangerment*. UNESCO Intangible Cultural Heritage Unit's Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. Approved 31 March 2003 by the Participants of the at International Expert Meeting on UNESCO Programme Safeguarding of Endangered Languages, UNESCO, Paris-Fontenoy, 10-12 March 2003.
- Whinnom, Keith (1956). *Spanish contact vernaculars in the Philippine Islands*. Hong Kong University Press.
- Zirker K. A. (2007).” Intrasentential vs. intersentential code switching in early and late bilinguals”, Master's Thesis, Brigham Young University, Provo.